



Title	1990年度岩見沢分校卒業論文等概要
Author(s)	
Citation	年報いわみざわ : 初等教育・教師教育研究, 12: 59-64
Issue Date	1991-03
URL	http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/8568
Rights	本文ファイルはNIIから提供されたものである。

1990年度 岩見沢分校卒業論文等概要

「学校」教育系

教 育 今年度の論文は以下の12編である。「自己実現と教育—マスロー心理学の研究と考察—」「自然を生かした総合学習の考察」「現代に求められる『平和教育』の研究—学校教育を中心として—」「戦前教科書の挿絵に関する研究」「森有礼—その思想と遺産—」「現代学生の意識、並びに社会的役割について調査と文献を通して考察する」「教育産業—『学習塾』・『予備校』の実態—」「教育における自己表現力」「演劇教育について」「私の道徳教育観」「ルソー哲学の現代的意義」「言語・国語・教育」。
論題は多様であり、各々自己の問題意識を強くうち出そうとする意欲が感じられる。

教育心理 以下の論文11編が提出された。「態度の極化現象に及ぼす思考の影響及び態度対象に対する関心度の影響」「創造性を高める作文指導」「創造性を高めるための音楽教育方法の開発」「トレンドィドラマ視聴とライフスタイルの関連」「自己開示の個人差に関する要因」「異性間の好意を規定する要因」「教室における多動児」「音像の頭内定位について」「知的好奇心を喚起する討論法の検討」「思考ストラテジー形成のためのコンピューター支援法の検討」「紙芝居を媒体とした障害児との交流方法の検討」。いずれも実証的研究である。また、自分の問題意識を深めたレベルの高い研究もいくつかみられた。

「言語」教育系

国 語 現代文学7、古典文学2、児童文学2、近代文学1の計12編が提出された。そのうち①「島田雅彦論序説—或いは二十一歳の三島由紀夫批判—」②「志賀直哉論—青年期の自我をめぐって—」③「龍の子太郎論」④「遠藤周作に関する—考察—遠藤文学におけるサド—」の4編に意欲的姿勢が認められる。①は観念と行動の心身二元論を基底に据え、作家島田の問題意識を三島由紀夫を通して浮彫りにした。言葉の腐蝕作用が進む中で、政治と文学・知識人と大衆等の乖離の中にある現代文学の在り方を鋭く追求した。②は他者認識を日記や手帳から丹念につむいでおり、志賀直哉の自我至上主義の解明に努めた。③は創作意図、異類婚姻譚、自我の確立等を丁寧になぞり、松谷作品の今日性を追求した。④は従来避けられてきたサドの問題に言及し、遠藤文学のサド離反を照らし出した。尚、提出12編中、2編が論文審査で不合格となった。

書 写 ◎「良寛の生涯と書」～僧としての良寛と書人としての良寛の生き方を探る。
◎「龍門造像記考」～北魏という時代と地理的要因を踏まえ、南期との比較や仏教的背景を通して龍門造像記を考察する。
◎「書聖 王羲之について」～王羲之の人物像とその作品の考察。
◎「孫過庭と書譜」～唐における孫過庭の時代的位置と、代表作である書譜を中心に孫過庭の書の世界を探る。

外国語 今年度の外国語研究室の卒業論文は8点であり、それぞれ、日本語と英語のことわざの比較研究、欧米人に日本語の漢字を教える場合の問題点、M. Twainの二大作品(ハッ

クルベリーフィン、トムソーヤ)の研究、L.Carrollの「不思議の国のアリス」を、当時の英国の児童教育の観点から考えたもの、グリム童話の心理的立場からの研究、R.P. Warrenの「天使の群」について、差別社会、主人公の人生観などを考えたもの、「星の王子様」を通して児童文学を考えたもの、R.Wrightの「アメリカの息子」をもとに黒人文学を考えたものなどであり、総じて、アメリカ文学関係のものが目立った。

「社会」教育系

歴 史 世界史の分野では、大航海時代における私掠船と海賊の活動と役割について考察したもの、中国最後の皇帝溥儀の生涯を中国近・現代史の中で考察しつつ彼の心理面にも論究したもの、ベトナム戦争を主としてアメリカが果たした役割から検討したものの3篇であった。論文として集大成された成果もさることながら、卒論ゼミにおける討論を通して得られた知見が貴重であったと思われる。日本史の分野では、豊臣秀吉の朝鮮出兵の背景、問題点を論じたもの、そして北海道史に関係する分野で、北海道開拓の歴史のうちで囚人労働の果たした役割、囚人労働政策の問題点などを論じたもの、北海道の石炭、鉱山の歴史をふまえ、最近の石炭政策の諸動向、産炭地にうける影響を、夕張市を調査してまとめたものの2篇があった。合計3篇とも、現代社会の諸問題との関わりも意識してまとめている共通点があった。

地 理 今年度は3編の論文が提出された。「北海道における海岸地形の地理学的考察」は、2名による共同研究である。北海道における海岸地形研究の一環として、今回は小樽市銭函町から余市町に至る海岸線に認められる隆起海食洞に注目し、その分布と古地理との関係を考察した。「北海道アイヌ集落の地理的研究」は、教員養成大学の学生としてアイヌ民族に対する正しい理解を深める努力が必要との認識のもとに、アイヌ集落について、歴史地理的見地にたつての、ごく基礎的研究を行ったものである。「館県・三県一局時代と北海道分県論」は、最近、いろいろある北海道分県論をとりあげている。北海道の行政についての歴史的背景を検討し、分県運動の歴史・必要性・その場合の手続き等の問題点について述べ、最後に幾つかの具体案の例を検討し、著者の分県案をあげている。ユニークなテーマが多かった今年度の卒論であった。

法 政 本年度の卒業論文は、国家賠償法に関する判例の中から学校事故に関するものを取り上げ教師に要求される注意義務の一般的内容と具体的内容を分析した「教師の児童・生徒に対する注意義務について」、マス・メディアの存在と子どもの政治的社会化との関係を分析した「政治的社会化の研究」、「偏向教科書」問題と新聞報道との関連性を検討した「『偏向教科書』問題と新聞報道」、実際の小・中・高校の校則を分類し問題点の指摘を試みた「校則の研究」、地方公共団体に現在制定されている個人情報保護条例の全体的傾向と特徴を探ろうとした「地方公共団体における個人情報保護措置」及び官公労働者の労働基本権制限の法理とその合憲法性を最高裁判例の動向とともに跡づけた「官公労働者の労働基本権」の5編であった。なお本年度も岩見沢市民会館で公開の卒論発表会を行い、すこぶる有益であった。

社 経 社会学関係では、それぞれ「人間と自然」「女性論」「国家とナショナリズム」「第三世界」「現存社会主義」を主題とするもの、計5編がまとめられた。準備不足のものもないではないが、全体として、相当量の文献資料の読破にもとづいた、このグループ

では近年にあまり例を見ない、すぐれたものとなっている。地道な勉強の成果であるが、いくつかのものについては、独自の問題意識や知見が示されて参考資料の域に達していることが喜ばれる。

経済学では、欲求論一つが提出された。この分野は本格的な研究テーマとはなっていないこともあって、理論構成に困惑を感じたのが本当のことであろう。しかし従来貧困論が研究対象となっても欲求そのものは対象とされえなかったことからして、問題提起の一步前進とも言える。それが故に古典の勉強が強く求められたのであるが。

哲 倫 哲学の卒論のテーマは童話に関するものが二編、すなわちマザーグースを扱ったものと古田足日を扱ったものがあった。勿論視点はそれぞれの思想を中心としたものであったが、子供の教育とも直結する興味深いものであった。もう一編はマキアヴェッリの思想に関するものであった。本格的な哲学書と取り組む論文が少なくなった代り、それぞれの関心にそった素直なものが多くなる傾向にある。

倫理学では「史記」と「太平記」に見られる乱世時の価値観を探ろうとした二編。前者は覇者の優位性と敗者の対照性の中に、司馬遷の真意を。後者は口語訳の上、政争の史実描写に儒教主調、の把握を意図していた。現代のめまぐるしい流れにまきこまれていく学生方も真摯に自らの価値観の確立を求めて、テーマに古典を選ぶ態度は頼もしい。併し、意図追求のための基礎力や時間不足は惜しい。生涯に期す外ないのか。

社会科教育 本年度の卒業論文のうち3点が、身近なモノ・コトから「歴史」を考えることをテーマとした。〈近代日本の食文化―献立表からみた―〉と〈断章 日本の台所―かまどから電気釜へ―〉は、いずれも婦人雑誌と家庭科教科書を資料に、献立、かまどの変遷をていねいにあとづけた労作である。〈聚富の歴史〉は、郷土の歩みを、文献のみならず、古老から聞き取りを加えて生活誌的にまとめた。居住者地図、田畑の変遷などは、その地に住む人間ならではの仕事である。これらの論文作成の過程で「歴史や時代が遠い向こうにあるのではなく、近くに見ることができた」ことを実感しており、教材づくりへの確かな足場をかためたといえよう。〈南アフリカの子供たち―教育と差別―〉は、資料的制約もあり、子どもの姿を描出するには至らなかったが、現代日本の子どもを見る眼を培うことができた。

「自然」教育系

算 数 解析学ゼミナールでは、微分積分学を厳密に再構成したスピバックの「多変数解析学」を3名で輪読した。

代数学ゼミナールでは、大学で学ぶ代数学の中で最も美しいとされるガロア理論を、アルティン教授の有名な教科書「ガロア理論」で学びました。てごろな練習問題がのせてあり、よい勉強になりました。

幾何学ゼミナールでは、三次元空間内の曲線と曲面の微分幾何学の基礎を研究した。特に具体的ないくつかの曲面を例に、ガウス曲率と平均曲率の計算を試みた。

数学教育ゼミナールでは、大正期の歴史研究として「清水甚吾の作問中心学習」、調査研究として「グルーピングの考えを視点とした記数法の獲得」を主題とした卒業論文を作成した。よくまとまっていた。

物 理 私達の卒業論文「酸性雪と導電率の関連と札幌市周辺の影響の研究」では、札幌市の36地点を任意で抽出し、数回にわたって雪を取り、その雪の酸性度と導電率を計測しました。そして得たデータをコンピュータによってグラフ処理をし、酸性度と導電率の間にはどのような関係が成り立っているのかを考えてみました。この実験の意義は雪に含まれている物質が雪の酸性度にどのような影響を示しているのかわかることです。また私達は追加実験として岩見沢における雪の酸性度の時間的な変化を実験しました。この実験によって大気に含まれていて雪に付着していく物質がどれくらいの時間を経てなくなっていくかわかるようになります。

このような実験を基にして、私達は札幌市の大気汚染はどのような状況になっているのかを考えました。

化 学 卒業論文のテーマは、理科教育・分析化学・高分子化学・生物化学の多岐に渡って行われた。論文題目は、パーソナルコンピュータを駆使した「最新元素データソフト《元素くん》の制作」および「パーソナルコンピュータ制御スクエアウェーブボルタンメトリーに関する研究」、生物化学分野における「植物における昆虫誘引物質の検討」、電子回路技術を駆使した「多機能電気化学分析装置の開発」、高分子化学と理科教育の融合を試みた「染料と繊維についての研究とその教材化」、電気化学的測定法を利用した錯体化学における「バナジウム(IV) -ピロカテコール錯体のポーラログラフ的研究」である。

教官1名が米国研修から6月に帰国したこともあり研究着手が遅れたこともあったが、いずれの研究も今後の発展が期待されるものであった。

生 物 「ボルボックスの生活環、特に有性生殖過程について」(川村 栄、後藤雅毅、高橋麻希、松本昌也)は、岩見沢市内の水田から得られた緑藻ボルボックス(未同定種)を培養し、その無性および有性生活環について観察を行った。特に後者については、接合子の発芽条件について検討し、発芽過程の形態変化を明らかにした。また、塩化ニッケル水溶液による栄養群体の麻酔も試みられた。

「エンハンサー・トラップ法によるキイロショウジョウバエ(*Drosophila melanogaster*)発生過程における突然変異の分離と解析」(村上誠一、村上佳隆、脇さつき)は、動く遺伝子P因子を用いて挿入突然変異を生じさせ、挿入部遺伝子の発現を酵素染色により可視化し、その遺伝子の発現の時空間パターンを解析した。腹部組織内で発現している系統が数十系統得られ、変態過程での発現の様子を明らかにした。

地 学 本年度は美瑛市光珠内-落合間を調査地域とし、古第三系・新第三系・第四系の分布・岩相を明らかにすることを目的とした。このため野外調査を約50日、室内作業および実験を約60日行ない、基本となる地質層序・地質構造をある程度解明できた。特に新第三紀末の海成層の連続露頭が人工的につくられたため、この時期(約200万年前)の海退の状態が推定可能になった。しかし調査域西縁部の地質構造が複雑なため、古第三系(石狩炭田主要層)の層序・構造には不明な点が多く残った。今回の卒論で悔やまれることは、3年生までに取得すべき単位数が極端に少なかった学生が半数程度おり、彼らが卒論に全力投球できなかったことである。大学生活に求められることのひとつに、専門性のある程度深めることがある。その意味では、今回の卒論に対して消極的な評価を下さざるを得なかった。

「芸術」教育系

- 音楽** 音楽では12編の論文が提出された。
- 1) 指導者における歌唱教育の一考察 2) シューマンのピアノ曲「パピヨン作品2」について 3) ドビュシーその環境と音楽 4) 「音楽教育における基礎指導について」 5) 箏曲にけおる楽理について 6) 「音楽療法の概論」 7) 「西洋音楽における種々の和声」 8) 「音楽教育のあるべき姿とは」 9) 「音楽教育における感性を育てるための一考察」 10) 「音楽をつくって表現できるようにする」 11) 「わらべうたをとり入れた音楽教育についての考察」 12) 「乳幼児期の音楽～音楽の歴史をふまえて～」
- 音楽科の卒業論文について特徴をあげるならば、音楽教育に関わる題材と取り組む傾向の強いことである。

- 図工** 絵画は油彩3名、版画1名。油彩は3人とも人物を題材にして、それぞれ装飾的な平面表現、空間、奥行の表現、動きの表現を追求していた。版画は銅版でマチエールの実験によるイメージの探究というもの。彫塑は1名。等身大の人物塑像でオーソドックスな量と空間の追求であった。工芸は2名。どちらも木による立体造型で、木とプラスチックという異素材の層的組み合わせのおもしろさをねらったものと、有機的曲線による造形の追求といったものであった。理論は2名。色、特に青について色々な方向からアプローチしたものと、デヴィット・ホックニーについて論じたものである。それに加えてそれぞれシルクスクリーンと写真による作品を制作していた。昨年度から全体に小論を課し言葉での確認作業を行なったわけであるが、今年度はそれを発表するという事で全員による論文発表会を行なった。

「生活・健康」教育系

- 体育** 今年度は合計10本の卒業論文が発表された。体育心理学の分野では、メンタルトレーニングの効果、運動部の人間関係に及ぼすリーダーシップ、そして大学生の体育会に対する価値意識を調査したものが発表された。体操関係では、跳馬運動の回転技術と床運動の回転技術をバイオメカニクス的に分析したものであった。生理学の分野では、筋肉の瞬間冷却の効果と手足の側優位性、いわゆる利き手利き足の検討をしたものであった。小学生を対象に実践授業を行い、表現運動の試みも発表された。また研究室における継続研究もあった。スキーの回転技術におけるストックの有効性を調べたものと、跳躍運動を水泳のスタートに応用し、運動効果を力学的に分析したものであった。いずれも例年通り、内容的にしっかりしたものであった。また、将来、学校現場やスポーツ場で活用できる内容が多かったのは特徴的であった。

- 技術** 情報基礎教材として、「BASICによるグラフィック作成用ソフトの開発」を行った。本ソフトはコンピュータの基礎知識なしに使用でき、プログラミング、セーブ及び呼び出し等コンピュータによる情報処理技術を理解できるようにしてある。
- 普通朝顔の播種期による開花の変化の調査について（山本悟己）。大輪朝顔の行灯作りと播種期による開花の相違についての実験、観察（四位賢一）。
- 「パソコン用彫刻エデター」：彫刻マシンを有効に利用できる収納台の製作と彫刻用ソフトであるエデターのプログラム編集を行った（古田泰隆）。
- 「温風ブローワー製作」：ベルトサンダーの排出する切屑を効率よく集める装置を製

作した（松本和彦）。

家 庭 食用タール色素について、輸入菓子と国産のものとを比較したものと及び露店菓子の飴類を対象とした実験2編が報告された。調理に関する実験では、3種のゼリー化剤について、単独や混合した場合の物性を調べ、好ましいとされるゼリーの物性値の究明がなされた。衣生活関係では、アンダーウェアの保温性の観点から、素材性能及び特性について実験的な解明が報告された。また、ジーンズ着用について、大学生の着用実態調査等から、男女別にその着用状況や傾向が示された。その他に、本学学生の消費者教育に対する意識調査から、教育養成大学における消費者教育への取り組みの構想が示された。男子大学生の食生活の問題ある実態から、その原因としての性別役割や家庭科教育との関わり等について考察がなされた。更に、最近問題となっている「食物アレルギー」を取り上げ、実態調査等を基に興味ある事実や内容が報告された。

総合教育 本年度は、以下9編の論文が提出された。「小学校低学年ことば指導の一考察」「学校教育における自閉症児指導についての課題」「小学校における学校教育相談活動——養護教諭の役割を中心に考えて——」「子ども理解から始まる教育——教師の『記録』を手だてとして——」「剣道をめぐる問題の変遷」「公害・環境教育に関する一考察——授業書『たべものとうんこ——地球はひとつ』をもとに——」「これからの野外教育の課題」「科学者の社会的責任についての一考察——オッペンハイマー事件、ビキニ事件をとおして——」「けがのない部活動の改善」。テーマにみられるように、例年のように内容は多岐にわたった。諸資料の収集に努めることや、論文への見とおしをもつことなどに苦労したようだが、各人の努力の跡は十分にうかがえたようにも思う。